眠る女

大原富枝

新潮社版

眠る女

昭和四十九年三月十日印刷
昭和四十九年三月十五日発行
定価九〇〇円

著者　大原富枝

発行者　佐藤亮一

発行所　新潮社
東京都新宿区矢来町七一　郵便番号　一六二
電話東京03(260)一一一一(大代)振替東京八〇八

印刷　東洋印刷株式会社
製本　共同製本株式会社

© Tomie Ōhara, 1974, Printed in Japan.

乱丁・落丁本はお取替えいたします。

目次

第一部　黍殻人形　5
第二部　犬と狼の間 *entre chien et loup*　71
第三部　娘たちの家　133
第四部　青く青き子(きみ)が衿　193

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.co

眠る女

装画　竹内真理

第一部

黍殻人形

黍畑は、私には深い林のように見えた。姉がそのなかに分けいってゆくとき、畑の岸で、

——ここで待ちよりよ、の！

と念を押す。

私はそこで待っている。しかし、だんだん夕暮れてくる畑の岸で、一人ぽっちでいるのが心細く、もの悲しくなってくる。それでいつも黍林のなかに迷いこんでしまう。

——姉やーん！

姉の答えは、私の見当をはずれたとんでもない方向から聞え、ぺしっと汁液の多い黍の莢を折る爽かな音がする。

黍の幹は細くやさしいが、その葉は猛々しいほど逞しく、縁にぎざぎざを持っていて、私の剝きだしの手足や、柔かい頬を傷つける。

——姉やーん！

呼んでみてはその答えに耳を澄し、私は見当をつけて黍林のなかを漕いでゆく。薙刀のように長い大きな葉っぱの、敵意のみちたなかを潜ってゆく。しかし、姉の声はそのたびに、私をからかうようにちがった方角から聞えてくるのであった。

黍の莢は一本の幹に四本も五本もついているが、今宵食べごろというのは一本に一つあった

りなかったりだ。姉は、先端に赤い鬚の垂れている黍の頭の方の皮を爪で少しめくって、粒々の一つに爪を立ててみては、その食べごろを調べ、あちらで一本、こちらで一本と選んでいる。

高いところから眺めると、黍の葉のさやぎですぐわかるはずだが、幼い私には、その姉がかくれんぼのときの姉のように、とても捉えることは絶望だと思われてくる。

姉とかくれんぼをするとき、私はいつも鬼である。ジャンケンできっと負けてしまう。それはもういつも必ず負けるのであった。鬼にされた私は丸々とふくれた小さい手の甲を見せて眼をおさえている。——鬼さん、こちら！　姉の声が家の裏手でするので私は走ってゆく。家の裏手には椎の木が一列に並んで植えられている。防風垣であった。その太い幹のかげを私は探してゆく。——鬼さん、こちら！　もう姉の声は表庭の植込みの方でしている。私は走ってゆく。太い槙の木の幹の後にきっと姉はかくれていると思う。しかし、——鬼さん、こちら！とまたまったく別の方角の山吹の茂みのかげから、姉の声がするのである。

夕風が渡ってくると黍畑の薙刀のような猛々しい葉は、衣ずれのような冴えた音をだして、いっせいに女たちのように密やかなおしゃべりをはじめる。それが私には魔法つかいの老婆のおしゃべりのように、淋しく恐ろしかった。

——姉やーん、どこーッ？

半分泣きべそをかきながら私は呼ぶ。私のもといた畑の岸にぽっかり姉の姿が現れて、

——ここにおりよ、というちょいたのに……

姉の怒った声がする。それが合図のように私は泣きじゃくりをはじめながら駈けてゆく。姉の抱えた籠のなかから、一本か二本、私は黍の莢をとり出して抱える。そうしなくては淋しい畑の岸で心細さに耐えていたことの意味がない気がする。どうしてもそれが持ちたいのであった。持たなくては承知しないのである。そのことでまた姉にいつも叱られ叱られするのだが

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

……

村の小径は石がごろごろしていて坂道である。坂道の途中に泉が湧いていた。切岸の岩盤が深く掘られて水槽になり、その底から清水がふんだんに湧きでていた。そこから溢れる水は二番目の浅い水槽に溜められ、さらに溢れて坂道に添って小溝になって流れている。泉の上の切岸には椿の大木がわっさりと笠のようにさしでて茂り、雨の日も泉の水には雨水がはいらない。泉ももうすっかり暗くて冷んやりしている。泉の神様ももう眠ったのだ、と私は思った。

村の人たちは泉を大層大切にしていて、年末には、ゆずり葉と裏白を挟んだ注連縄を泉にさげて、泉の神さまの迎春の用意をととのえる。泉の底に、長い白鬚を生やした神様がいるのだ、と私は信じていた。夜になると私は神様が怖くなる。しっかりと姉の身体にくっついて泉の傍を通りぬける。

坂道はやがて平らな四つ辻にでるが、そこから高い杉垣をめぐらした家々の間の暗いところを抜けると、また田圃のあいだのゆるやかな上りになる。小径の傍をやはり小溝が流れていてちろちろ音がしている。遠くで、くつわ虫が盛んに鳴き立てている。あちらでも、ずっと向うでも、方々で鳴き立てている。くつわ虫は毎晩同じ畑のいんげんの茂みのなかで鳴く。だから私たちは西の畑のくつわ虫とか、朋美さんの畑のくつわ虫とか呼んで区別していた。近くで鳴き立てると喧ましくて堪えられないこの虫も、遠くで聞くと潮騒のようなリズムになって、子守唄のようにやさしく聞える。だから子供たちもくつわ虫は捉えたりしない。遠くの方の畑で気儘に鳴かせておく。

小溝は山の上の大きな用水池から流れてくるもので、段々の山田のあいだを縫って里まで流れてくる。用水池は「みやまの池」と呼ばれていて、そこには主の大蛇がいるというので、私は芯から恐れていた。その水は網の目のように分れて、村の田圃を養っている。私の家の北に

も東側にも、西側にも小溝は流れていた。
うちの勝手口の灯が、腰高障子に映ってぼんやりと仄暗く橙色に染めているのが見える所まで帰ってくると、私はきまってほっとする。ぼやけた灯かげに、私はいつも母の体臭がほの温かく頬のあたりに立迷うのを感じる。
勝手口の柿の木の下で、私は姉と黍の莢の皮を剝いた。黍の殻は、外の方は緑色の固い皮をつけているが、内側の、実をしっかりと包みこんでいるのは、白っぽい黄色をしていて、布のようにうすく、撓やかである。
夕食のあとで母は北側の小部屋で黍殻人形をつくってくれる。北窓のある長四畳で、そこは母と私たち姉妹の寝室になっていた。母はしなやかな黍殻の一枚に赤い鬚を少しふくませて巻いてゆき、それを起してちょいとつまむと人形の前髪ができた。別の一枚にやはり赤い鬚をふくませて巻いてゆき、ちょいとつまむと島田まげの部分ができた。同じようにして母は、両方の鬢のふくらみと襟足に出るつ、との部分を作った。
前髪と両鬢とつとの部分を形よくまとめて結び、その中心に島田まげの部分を上から挿してそれらのあまった部分をしっかり束ねると人形の身体になる。母は桃割れの人形も作ってくれたし、丸髷のお母さんも作ってくれた。ひさし髪の女学生も作った。
人形づくりの最中に、隣のたみやんという女の子が、お祖母さんに負ぶわれて遊びにくる。たみやんは毎晩のようにやってくる。姉より一つだけ年齢下だったが、一人ッ子なのでずいぶん大きくなってからもよくお祖母さんに負ぶさっていた。
隣は「高石のお医者さん」と村の人たちに呼ばれる。たみやんの父親は、校医もしているやさしい無口なおじさんだ。うちの父とは親友であった。
たみやんの家には曽祖母さんと、もう一人お祖母さんがいる。曽祖母さんは背中が猫のよう

に丸くかがまっていて、隠居所の日溜りに一日坐っている。巾着のように皺をたたんだ口を、つむったままもぐもぐさせている。何も食べているわけではないのにいつもそうしているのが、私には気になった。

お祖母さんの方は六十歳を少し越したか、六十前くらいで、男のように岩乗な身体つきの背の高い人だ。笑うときも大声で開けっぴろげに笑う。遠慮したり、人に気をつかったりはしない人のようだった。

たみやんは曽祖母さんと区別するために、「若祖母(わかばあ)やん」と彼女を呼んでいた。姉と私は他家のお祖母さんなので「若ばあさん」と呼ぶ。舌足らずな私が呼ぶと「ばかばあさん」と聞えるといって、苦労性の母は気兼ねし、何回も私に「わ」の発音を稽古させた。私は、「わ」の発音はできるのだが、続けて言うとうまくゆかないのであった。

若ばあさんはゆかたの袖を肩までたくしあげて白い痩せた二の腕をあらわにしながら、たみやんを負んぶして裏庭から廻ってじかに北窓のところにやってくる。中敷居になっているその窓に、自分はそっぽを向いて孫をすぽっと背中から部屋の中にすべり落す。それからくるっとこちらを向いて、

——ああ、暑い、暑い！

とひとしきり持ってきた団扇をつかう。

北窓の障子に青い稲妻がパッパッと映っている。たみやんと姉と私は、先を争って耳に両手をあてて畳に突っ伏す。眼をしっかりと閉じている。姉とたみやんがそうするので私も負けじとそうする。毎日、私は姉とたみやんのする通りに、何もかも真似している。

瞼の裏に、黄色い輪がいくつも重なりあったり、連なったりして、浮んだり消えたりする。畳の古くなった藺草の臭いと、埃りの臭いが突っ伏した鼻にくる。自分一人なにか地の底に吸

いこまれてゆくようだ。心細くなってそっと眼をあけてみると、姉とたみやんは突っ伏したまま、お尻を立てて顔を横に向き合い、耳を覆った手をパッパッとはずしたり覆ったりしてふざけ合っている。出来る限り速くそれを繰り返して、雷が鳴りはじめたかどうか試めしている。それがおっかなびっくりで、面白くてたまらないようにげらげら笑っている。私も急いで手をパッパッとやってみる。二人からは除け者にされているけれど、仲間入りしているつもりで、二人のする通りにやってみる。そして私もげらげら笑う。

雷はなかなか鳴らない。げらげら笑って、燃えるように頬が熱くなって、身体を起し、手を耳から放したとたんに、まるでそこを狙っていたように、雷は、遠い遠い地の底から、大きな石臼を転がすように、不意に鳴りはじめる。低いが腹の底に応えるような凄い音で、家が震えて共鳴する。三人の女の子たちは叫び声をあげて耳をしっかり掌で覆う。

たみやんの母親は大柄なゆったりした美しい人であったが、無口で不愛想な、とっつきの悪い人であった。若ばあさんは家つき娘育ちで、何でも思った通りに口に出す。息子の嫁の無口で不愛想なのが気に入らない。

——友恵さんもなかなか気苦労がいきますことぞよのうし……

と母がたみやんの母を慰めているのを私は見る。

友恵さんは新しい帯を作っても、自分の家へは持って帰らず、母の箪笥のなかに蔵って貰っておく。そんな内証ごとを、私はふっと眼にすることがある。姉も父も学校へでかけて留守のあいだのことである。母は私が眼にしたらしいと知ると、キラッと怖い眼になって私を見、あとは知らぬ顔をしている。なにも言わない。なにも言わないときの母は怖いひとであった。なにも言わないことでそのことは消えて無くなってしまう。何度か私は経験してそう思うようになっている。ふーんと思うだけである。

若ばあさんと母とは蚕の話をしている。私たちは「蚕さま」と言った。そのころ繭の値がよくて、どこの家でも蚕を飼った。百姓ではない、隣にもうちにも蚕がいた。

――上の家の蚕さまは、もう三度を眠えたのに、うちのはまだ最中桑を食いよるが。明日もまだ眠んらしい……

若ばあさんが言っている。

蚕が三眠から覚めると、家中が蚕棚になってしまう。百姓家ではないので納屋も蚕室もなく、家は蚕に占領されて、人間たちは小さくなって過す。蚕は四眠までは大概無事に育つが、上簇間ぎわに「はっきょう」になることがある。これが出たら大変で、次から次へと伝染してゆくので、一匹でもでたらそのえびら一枚を捨ててしまわなければならない。一枚だけでなく全部捨ててしまうことに、大概なるのであった。どこそこの家に「はっきょう」がでた、という情報は、忽ち村中に伝えられてみんな震えあがってしまう。白殭病に罹った蚕は、黒や褐色の斑点ができ、だんだん硬く小さくしぼんでいって赤っぽくなり、終いには真白に粉が噴いたようなコチコチの塊になってしまう。

苦労して育ててきた女たちは、寝こんでしまうほどがっかりする。

うちの蚕さまが「はっきょう」にならないように神様に守って貰うために、私たちは蚕のいるあいだは親のいいつけをよく肯いた。

黍殻人形の島田や桃割れは、日が経つと黄ばんで硬くなり、こぢんまりと緊ってくるが形は決して崩れはしない。私はそれを菓子箱の中に大切に寝かせて蒲団を着せておく。

初秋蚕が終ると、母は縫物をはじめる。色とりどりの友禅メリンスの布地がふんわりと、幾組も母の裁板の上に積みあげられるのを、私たち姉妹はどれが自分たちの晴着になるのだろうか、と思い惑うのであった。

――お利口で寝よりよ、そうしたら明日の朝は、きれえなお着物が縫いあがるけにの！

と母が言う。

しかし、縫い上った美しい晴着は、次々と他方の人に渡されて消えてゆくのだった。

晩秋蚕も上簇り、繭も出し、麦蒔きも終ると、村の娘たちが裁縫を習いにやってくる。こてやアイロンを使うその部屋は、それでなくとも娘たちの体温と息吹であたたかい。その部屋の片隅で私は姉と、夏の宵に母が作ってくれた黍殻人形に、端ぎれで縫ってくれた着物を被せる。そして立矢やお太鼓に帯を締める。黍殻人形は飴色に乾からびているが、とりだすと甘い黍の匂いがまだ微かに残っていた。

村の娘たちは毎夜たくさんの話をする。新家の誰さんがどことかの次男に嫁入りするそうだ、とか、誰々が、何々さんを好きなのだ、とか、何々屋敷の婚礼は何月の何日に決ったそうだとか、殆どがそうした噂話であった。母は子供の私たちに聞かせたくない話題のときは、そっと話し手に眼で知らせた。しかし、そういう話のときは私たち姉妹も聞耳立てていて、母の眼くばせもちゃんと見ている。誰と誰とは恋仲らしいとか、あの二人がそっと逢って話しているのを、誰とかが見てしまったとか、その種の情報はいつも一番早くここで、誰かが話すのである。

父は、姉が三つくらいのころ、強い神経衰弱になったことがある。そのころはまだ、狭い学校の教員住宅に住んでいて、いたずら盛りの姉が、郡視学や県視学への報告書のための調べものや、その一方で受験勉強もやっていた父の膝にまつわって絶えず邪魔をする。煩わしいと思いながらも、初めての子供で可愛くて叱れなかった。我慢しいしいやっているうちに、いつのまにか脳神経を病んでしまったのだそうだ。気が鬱して死にたくなり、ある日は人影のない村道を歩いていて、突然獣の断末魔のように咆えたりした。誰もいないようでも、どこかの畑に村人がいて、驚いてそれを眺め、母にそっと知らせた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com